

千葉の園芸

発行所 千葉市中央区市場町1-1
公益社団法人千葉県園芸協会
連絡先 043(223)3005
発行日 毎月1日
平成31年1月号



平成31年の新春を迎えて



公益社団法人千葉県園芸協会
理事長 間 洵 誠 一

明けましておめでとうございます。

皆さまには、輝かしい新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

会員の皆様方には、日頃、本県の園芸振興に多大なる御尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

なお、昨年10月に発生した台風24号の農業被害額は、千葉県の過去10年間において4番目に大きなものとなり、特に塩害は、多くの園芸農業者に影響を及ぼしました。

お正月気分には浸れない方も多くいると思われまふ。被害を受けた皆様には、心からお見舞い申し上げます。

このような気象災害の他にも、農業を取り巻く状況は生産者の減少や高齢化の進展、少子高齢化による国内消費量の減少や鳥獣による農作物被害の増加など、依然として厳しい状況にあります。

一方では、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に、更なる訪日外国人の増加などに伴った新たな需要の開拓が期待されます。

このような中、当協会においても関係組織と連携を密にし、支援体制の基盤を強固なものとし、千葉県農業の発展に向け、全力で取り組むことを、新年新たな気持ちで進めてまいります。

特に、当協会の基幹事業である園芸産地強化

事業においては、トマト、ねぎ、にんじん、さつまいもなどの本県の主要園芸7品目それぞれの品目別協議会を中心に、主要産地と密接に連携しながら、生産・販売力の強化に向け、積極的に取り組んでまいります。

また、農地中間管理事業においては、農地の利用集積を一層推進するため、関係機関と一体となり、市町村等への巡回により業務協力の要請を精力的に行うとともに、簡易な基盤整備である耕作条件改善事業等にも積極的に取り組んでまいります。なお、平成30年度は、現地推進員を10名から13名に増員し、よりきめ細やかな地域推進ができるよう、体制を強化したところです。

さらに、昨年、農業者の総合的な相談窓口として設立された「千葉県農業者総合支援センター」に、新規就農・6次産業化・農地中間管理事業の面で積極的に参画しております。

当協会としましては、関係者の皆さま方のお力添えを頂きながら、全国屈指の農業県としての誇りとともに、益々の発展に向け努力してまいりますので、なお、一層の御支援、御協力をお願い申し上げます。

終わりに、皆さま方の御健勝、御活躍とともに、本年が実り多き年となりますよう、お祈り申し上げ、年頭の御挨拶といたします。



和郷園グループのかんしょ販売額向上に向けた取組

香取農業事務所 企画振興課
副主幹 伊藤 禎昭

和郷園グループでは平成 29 年度の産地パワーアップ事業で、かんしょの貯蔵・調製出荷施設と加工施設を導入。従来のカット・冷凍野菜に加え、干しイモの商品化と青果向けの長期出荷を組合せ、かんしょの周年販売と輸出に取り組むことで、販売額の向上を目指しています。



施設外観

1 和郷園グループの概要

今回、御紹介する和郷園グループは、厳しい独自基準により農産物を生産する県北東部エリアの生産者約 100 名を組合員とする「農事組合法人 和郷園」を中心に、加工と生産物流通を担う「株式会社 和郷」、「生鮮食品スーパー OTENTO」、「弁当・総菜専門店まんぶくさん」などの他、「農園リゾート施設ザファーム」や航空会社と共同出資し観光農園や P B 商品販売を行う「JAL Agri port」などをグループ会社とする、農業を軸とした幅広い事業展開を行う組織です。

2 事業実施の背景

和郷園グループでは 10 年ほど前から地域特産物であるかんしょの加工に取り組んでいます。近年、加工向け需要が増加していますが、もともとグループ内でのかんしょ生産量が少ない上に、生産協力組織からの供給量が不安定なため、グループ内のかんしょ生産拡大による原料確保と新たな加工品の追加によるかんしょの販売額向上を目的として、平成 29 年度に産地パワーアップ事業に取り組みました。

3 事業の概要

事業で導入した施設は 1 階鉄骨造りで、面積は約 750 m²です。施設内に定温貯蔵庫 (3 室合計 390 m²)、洗浄作業ライン (130 m²)、干しイモ加工施設 (230 m²) が配置されており、定温貯蔵庫はピーク時の計画量

17,100 コンテナ (342 t) に対応可能です。また、平成 14 年の国庫事業で導入したカット・冷凍野菜工場「さあや『S キッチン』」に隣接しているため、原料かんしょを工場へ円滑に搬入することが可能です。

事業の目標としては、平成 31 年度のグループ内作付面積を 25 ha、生産量 625 t に増やし、販売額を現状年度比 240% 増加とすることで、生産者の収益向上を目指しています。



加工施設内観

4 販売戦略

今年、和郷園グループの生産者が作付した品種はベニアズマが 4 割、ベにはるかが 6 割です。生産者は 9 月から掘り取りを行い、品種ごとに大 (2L 以上)、中、小、規格外の 4 段階の規格に選別、施設へ泥付きでコンテナ出荷します。施設ではこれを定温貯蔵し、55% をカット・冷凍加工や干しイモに加工し周年販売、残りを青果としておおむね 6 月頃まで契約販売する計画です。

また、グループの流通・販売を担う (株) 和郷では、今年度の県単「輸出促進事業」を活用し、「焼き芋」という食べ方を普及することで、シンガポールでのかんしょの需要創出に取り組んでいます。既に青果での輸出第 1 便が日本を出発し、12 月末にはシンガポールに到着、年明けから本格販売を予定しています。今後、青果については輸出量を増やすとともに、干しイモについても輸出を計画しています。

頑張る産地



若手による新たな風でわけねぎ産地に元気を!

千葉農業事務所 改良普及課
普及指導員 石丸 洋次

J A 千葉みらい土気地区出荷組合連合会わけねぎ部会のうち若手 3 戸から構成される「わけねぎ研究会」は平成 30 年 3 月、国庫事業を活用して共同調製施設を導入しました。これにより若手による規模拡大と調製作業の受託が可能となり、産地の維持・拡大を図る体制が整備されました。

1 産地の概要

わけねぎ栽培が千葉市土気地区に導入されたのは平成 5 年です。軽量で周年栽培が可能なおかげで土物野菜に代わる品目として栽培がスタートしました。

現在、J A 千葉みらい土気地区出荷組合連合会わけねぎ部会は、部会員 7 戸、作付面積 7ha、年間約 60t のわけねぎを生産しています。

平成 27 年 3 月に部会員 7 戸のうち若手 3 戸で構成される「わけねぎ研究会」が発足し、技術改善等の研究会活動を行い、部会全体へ技術を波及させる体制が整っています。

2 産地維持の解決策に至る道のり

平成 26 年の出荷量 92t を最盛期として、それ以降、部会員の高齢化に伴う作付面積と出荷量が減少し、産地の衰退が懸念されていました。労働時間の約 8 割を占める調製作業の機械化が進んでおらず規模拡大の制限要因となっていることが挙げられていました。

部会は「わけねぎ研究会」による労働調査の結果をもとに検討会を重ね、産地面積を維持するため、調製作業の省力化を図り、若手を中心とした規模拡大を進める方針を決定しました。

平成 28 年に国庫事業の産地パワーアップ事業の説明会を関係機関と連携して実施した結果、事業活用により、若手 3 戸を主体とした共同調製施設の導入が部会で合意されました。

施設の導入に当たっては、先進地を視察し生産者自らが共同利用の施設運営に取り組んでいる事例を情報収集しました。



共同調製施設の導入をめぐる検討会の様子

3 共同調製施設が稼働!

平成 30 年 3 月に共同調製施設として、洗浄皮むき機、包装機、予冷庫 (3 坪) の一式が導入されました。洗浄皮むき機は同時に根切り処理の機能があり、これまで手作業で行っていた根切り及び皮むき作業が約半分の時間で済むようになりました。また、結束後の袋詰め作業も、包装機を活用することで省力化が図られました。調製作業の時間が短くなったことでほ場管理の時間が増え、若手 3 戸の規模拡大につながっています。

現在、視察で得た情報を参考に運営規約等を定め、若手 3 戸が各々利用時間を分ける方式で施設を共同利用しています。

また、月別の稼働実績から施設利用に係るコスト分析を行っており、ケース当たりの利用コストを下げるには、高品質なわけねぎを生産し、施設の稼働率を上げる必要があることが確認されました。さらにコスト分析は雇用導入の際の人件費を試算する上で重要なデータとして活用しています。



施設で調製作業中の様子

4 今後の取組～作業受託の導入～

「わけねぎ研究会」は施設での雇用導入により、さらなる規模拡大を目指します。また、他の既存の部会員からは、調製作業の委託を望む声が上がっています。これに対し、研究会長であり部会長でもある鈴木宗一郎さんは「作業受託のモデルを作り、既存部会員の増産や新規栽培者の掘り起こしが出来る体制を構築したい」と作業受託に意欲を示しています。産地を担う若手のやる気が産地に新たな風を吹き込み、今後も期待が膨らみます。



省力作業機械を用いた改植の取組について

千葉県果樹園芸組合連合会なし部会

近年、県内梨産地においては、老木化による生産量低下が懸念されています。そこで、千葉県果樹園芸組合連合会なし部会では県と連携し、計画的な改植の推進及び後継者の資質向上を目的に、省力機械の操作講習会や改植作業の実演会を実施しました。

1 改植推進における課題について

日本なしは、本県果実産出額の 85% を占める重要な品目ですが、近年、老木化による生産量の低下が問題となっており、千葉県果樹園芸組合連合会なし部会(以下、「なし部会」)では梨の生産力維持のため、計画的な改植に取り組んでいるところです。

梨の改植には老木の抜根作業が必要で、小型車両系建設機械(以下、「油圧ショベル」)や梨専用抜根機械(以下、「抜根機」)等の機械による安全かつ効率的な作業をする技能の習得が求められます。

そこで、なし部会では県と連携し、生産者が安全に自ら改植できるよう技能習得及び資質向上を目的に、油圧ショベル操作の講習会及び改植作業の事例紹介として抜根機による抜根実演会を実施しました。

2 油圧ショベルの操作講習会について

油圧ショベルは、果樹生産において明渠、暗渠の掘削やほ場の整地、樹の抜根など様々な用途へ使用され、作業の省力化に大きな役割を果たしています。

今回はキャタピラー教習所の指導の下、17 名が 10 月 15、16 日の 2 日間で座学及び実技講習を行い、作業機械の能力を発揮する適切な使用方法について学びました。

1 日目は、千葉県農業総合研究センターで開催し、建設機械の基礎知識、走行に関する装置(油圧や付属機器)の構造・原理、物理・電気の知識、安全運転の心得や事故発生事例、関係法令等、幅広い知見を得ました。



油圧ショベル操作講習会の様子

2 日目は、白井市農家のほ場で開催し、2 台の機械に乗車して走行及び掘削、整地作業について学び、修了者には「小型車両系建設機械特別教育修了証」が交付されました。

3 抜根実演会について

11 月 16 日に船橋市農家のほ場で開催し、県内生産者及び関係機関併せて 51 名が参加しました。実演した抜根機は、クローラー自走式で梨園の棚下作業を考慮して車体が低く、油圧によりワイヤーで抜根する点が特徴です。

今回は樹齢約 40 年、幹周 170cm 程度の梨の大木を抜根しました。抜根方法は、主枝を落とし高さ 110cm 程度にした主幹にワイヤーを巻き付け、数回に分けて油圧で引き抜きます。作業中に折れ、土中に残った太い根は、再度ワイヤーを巻き付けて引き抜きました。



抜根実演会の様子

4 今後の活動について

参加者からは、省力的な抜根手法を知ることによって、今以上に積極的に老木園の改植を進めようとする前向きな姿勢が感じられました。

改植推進に当たり、より効率的な作業体系や外部委託化などを検討していきたいと考えます。

今後のなし部会の事業展開については、梨園の計画的な改植推進を図るため、国や県、市、関係機関と連携し、梨産地の課題解決に取り組んでまいります。

果樹ニュース



マンゴー「アーウィン」の安定着果技術

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所
特産果樹研究室 主席研究員 押田 正義

マンゴーの8月収穫作型では、適期に開花する花房数を増やし、着果数を確保することが重要です。そこで、マンゴー「アーウィン」における安定着果のための技術を紹介します。

1 はじめに

南房総地域では観光・直売向け品目として、8月に収穫する作型のマンゴーが栽培されています。この作型は主産地である西南暖地の作型（5～7月に収穫）とは異なるため、適切な栽培技術が明らかではありません。

そこで、マンゴー「アーウィン」の8月収穫作型において、安定着果を図る技術を開発しました。

2 春期せん定により翌年の結果母枝を確保

収穫期が早い西南暖地では、収穫後の6～8月に結果枝を切り返しせん定し、発生した新梢を翌年の結果母枝とします。しかし、8月収穫作型では収穫終了後にせん定をしても充実した結果母枝になりません。

そこで、収穫前の4月中旬～6月上旬に、着果していない枝の先端を切り返して予備枝とします。予備枝先端の新梢には翌年高い割合で花芽が着生し、着果率は高く、果実品質も問題ありません。

3 早く発生した花房は摘除し開花期を調整

「アーウィン」の花房は2月以降徐々に発生しますが、寒害及び燃料の節約の点から8月収穫作型では開花期を4月中旬～下旬に揃える必要があります。早く発生した花房を放置すれば、着果しない枝が増えてしまいます。

2月に発生した花房を基部から摘除すると高い割合で再発生し(写真)、4月下旬に開花します。外観は貧弱で着果率が低い場合があり、収穫もやや遅れますが、果実品質や収量には問題ありません。

4 開花期以降は最低気温24℃以上を保つ

マンゴー栽培では受精不良による着果数不足が問題となります。この原因の一つは開花期の低温で、訪花昆虫の活動が低下するとともに、花粉管の伸長が抑制されるためと考えられています。また、幼果期の低温は重大な生理障害であるヤニ果の発生を助長します。

開花期（4月）～果実生育期（6月）の最低気温を18～20℃とした年と24℃とした年を比較すると、24℃の年で着果数及び収量が多くなりました。ヤニ果はいずれの年もほとんど発生しませんでした。安定着果のためにはこの期間の最低気温を24℃以上に保つことが有効と考えられます。

5 おわりに

以上の技術を組み合わせることで、「アーウィン」の安定着果が可能になります(図)。なお、今回の試験は、防根シートを埋設した根域制限栽培で行っています。ポット栽培など栽培方法が異なる場合は、本技術をそのまま適用できない可能性がありますので、予備的な試験を行ってから導入してください。



写真 花房摘除により再発生した花房

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
温度管理	最低5℃で加温		最低24℃まで徐々に昇温			最低24℃で加温	暖房機停止 換気のみ		ハウス開放			
作業	花房摘除		予備枝設定			開花・受粉	摘果	×		×		収穫

図 マンゴー「アーウィン」の8月収穫作型の作業暦

平成31年度千葉県立農業大学校 農業者養成研修(前期)の募集について

1 対象

将来、県内で農業に取り組もうとしている方や既に就農している方が対象です。新規就農には、研修期間が12か月の部門別研修がお勧めです。

2 研修の種類と研修期間

平成31年4月から、基礎研修は3か月間、専門研修6か月間、部門別研修12か月間です。

3 応募受付期間

平成31年1月14日(月)～1月31日(木)
(消印有効)

4 応募方法

所定の応募願書等の必要書類を持参又は郵送してください。

※受講願書等は、ホームページからダウンロードするか、下記問合せ先へ請求してください。

5 選考方法

書類審査及び面接を行い、受講者を決定します。

6 受 業 料

3,300円/月(別途実費約3万円が必要)

7 提出・問合せ先

千葉県立農業大学校 農業研修科
〒283-0001 千葉県東金市家之子1059
TEL 0475-52-5140
FAX 0475-54-0630
<http://www.pref.chiba.lg.jp/noudai/>

「房総ジビエ」 消費拡大の取組について

千葉県では、野生鳥獣による農作物被害が年々深刻となっています。その対策として、県内で捕獲されたイノシシやシカの肉を「房総ジビエ」と名付け、その消費喚起に向け、平成28年度から、「房総ジビエ」活用普及事業に取り組んでいます。

今年度は、昨年度に引き続き、平成30年10月25日にジビエの衛生管理や調理方法などに関する講習会を開催しました。講習会には、57名が参加し、多くの方から「スキルアップに繋がる講習会だった」との感想をいただきました。また、平成31年1月26日～2月24日には、県内及び首都圏を中心とする飲食店で「房総ジビエ」を使った料理を提供する「房総ジビエフェア」を開催します。

また、今年度初めて、フェア前日の平成31年1月25日に、ジビエ料理のコンテストを開催することとなりました。

是非皆さまには、コンテストに御注目いただくとともに、「房総ジビエフェア」参加店舗に足を運んでいただき、「房総ジビエ」の魅力を味わっていただければと思います。

問合せ先：千葉県流通販売課

TEL 043-223-3085

第68回関東東海花の展覧会開催の御案内

関東東海花の展覧会は、関東東海地域12都県の切り花や鉢花など約2,000点が集まる日本で最大規模の伝統ある花の展覧会です。千葉県からは、約200点が出品予定です。是非御来場ください。

- 主催：関東東海地域1都11県(千葉県を含む)
及び全国花き関連6団体
- 会期：一般公開(入場無料)
平成31年2月1日(金)～2月3日(日)
(公開時間)2月1日(金)12:00～18:00
2月2日(土)10:00～18:00
2月3日(日)10:00～12:30
- 場所：東京都豊島区東池袋3-1-4
サンシャインシティ文化会館2階展示ホールD
- 内容：
花き品評会、フラワーデザインコンテスト
花の装飾展示、フラワーアレンジメント教室、
展示品の即売等。
問合せ先：千葉県生産振興課園芸振興室
TEL 043-223-2871



毎年約4万人の来場者で賑わう展覧会会場(第67回)